

《報告》

2014年度全学共通副専攻「ジェンダー研究」学生参加型ワークショップ報告

Report on the Student-Centered Workshop of the 2014 All-Faculties

Sub-Major in Gender Studies

はじめに

2014年度より、ジェンダー研究所メンバーが中心となって、グローバルエデュケーションセンター設置全学共通副専攻「ジェンダー研究」が開設された。これに伴い、春学期には館かおる先生を招いての講演会（『ジェンダー研究 21』vol.4掲載）、そして秋学期には3回にわたって学生主体の参加型ワークショップが実施された。本報告は、この学生参加型ワークショップの全体の趣旨、各回概要、意義と今後の見通しを示すものである。

趣旨

本ワークショップは、ジェンダーを主な関心領域とする矢内琴江、渡邊萌香、安野直の院生、学生3人に加え、新入職員研修として瓦家恵、野村一樹、湯谷香織を含めた6人の実行委員が中心となって運営を行った。適宜、村田晶子文学学術院教授、弓削尚子法学学術院教授の助言を頂きながら進めた。

本企画の趣旨は、ジェンダーをめぐる諸問題を学生同士が自由に議論・共有する場の創造にある。こういう取組みは学内にこれまでなかった。すなわち、同じ関心を持つ学生同士が、問題を共有し、言語化する場を参加者相互の関わりの中に見出すことが中心的課題となった。こうした問題意識から、3回のワークショップごとにその目的を設定した。以下では、それぞれの目的と各回の概要を述べる。

各ワークショップの目的と概要

①第一回「ポスターセッション」

ワークショップの第一回目として「ポスターセッション」を2014年11月21日（金）に実施した。第一回の主たる目的は、学生たち自身が、自分たちの取り組み（学内外の活動、研究活動）を共有することであった。

全体の流れとしては、事前に募った報告者によるポスターセッション、その後、参加者全員が各グループに分かれてのディスカッション、全体共有というものであった。ポスターセッションは計6本おこなわれ、セクシュアル・マイノリティをめぐる問題やフェミニズム・スタディーズ、女性更生施設や震災復興支援ラウンドテーブルといった社会科学的テーマから日本古代史におけるホモ・ソーシャルの問題といった人文科学的テーマまで幅広いものであった。ポスターセッションでは、話し手の一方的な報告だけでなく、双方向的な活発な質疑応答が行われた。

その後のグループディスカッションでは、ポスターセッションでの報告を発端とし、自由な話し合いが行われた。各グループ4～5人程度でディスカッションを行ったため、少人数での密度の高い話し合いをすることができた。ディスカッションで話題にのぼったテーマは多岐にわたるが、主たるものとして、学内におけるセクシュアル・ハラスメント、メディアにおける「おネエタレント」といったジェンダーステレオタイプをどのように見るか、ファッションとジェンダー、学校教育とジェンダーが挙げられる。

グループでの話し合いの後、全体での共有がなされたが、そこで出された意見としては、ジェンダーに関する話題は友人間では話しづらく、こうした場があったことがよかったこと、ポスターセッションを通して、関心を広げることができたこと、テーマを絞るのではなく話し合いの中から様々な問題を引き出したことで多様な学生が話し合いに参加できたこと等である。こうした意見からも、第一回の各自の取り組みや問題意識の共有といった目的は十分達成できたといえよう。

②フォト・ウォーキング

ワークショップの第二回目として「フォト・ウォーキング」を2014年12月16

日に実施した。フォト・ウォーキングとは、グループ毎に、大学のキャンパス内を歩き、自分が違和感を覚えた場所を写真に撮り、共有するというものである。このワークショップでは、大学構内をジェンダーの視点から歩き、その問題点を参加者全員で共有することを通して、自分たちが生活している大学の中のジェンダーの問題を明らかにすることが目的であった。

しかし、残念ながら12月という季節の問題や当日の豪雨、12:30～14:30という時間帯等が影響し当時は参加者が集まらず、中止となってしまった。しかしながら、当日は、前もって撮っておいた大学構内の写真を検討しながら、実行委員内でその問題点を共有し、3回目のプロジェクトづくりの素材として生かすことができた。以下では、その一部を紹介する。

- ・多目的トイレの表示が車いすのマークになっていること：多目的トイレを利用する学生は車いすの方に限らず、様々な事情の学生がいるのではないかと。

- ・8号館と9号館の付近にあるトイレ：利用者は少なく、また夜間は木々に囲まれていることもあり、防犯上安心して利用できるトイレとは言い難い。

- ・早稲田キャンパス8号館階段：ガラス張りで見え外から階段が見える。デザイン上は美しいのかもしれないが、短いスカートをはいていた場合、下着等見えてしまう可能性がある。

③「学生ミーティング」

第3回ワークショップは2015年1月23日に行われ、その大きな目的は、それ以前に企画し実施してきた2回のワークショップを踏まえて、大学に対して、学生たち自身が実感している学内のジェンダーの課題、どのような大学で学びたいか、大学でなにを学びたいか、を「発信する」ということであった。

当日は、参加者を5～6人の少人数グループに分けて、グループディスカッションを行い、第一回や二回で提起された問題点を下敷きとして、学内での課題を話

し合った。その後、模造紙やふせんなどを使用して、ジェンダーやセクシュアル・マイノリティの視点からどのようなことが求められるかについて、話し合った。各グループの話し合いの中でまとめられたプロジェクトは、自由に模造紙にまとめて発表することで、全体の共有をはかった。共有に際して、プロジェクトの①テーマや名称、②問題提起、③解決方法など最低限のフォーマットを整えることは求めたが、時間が限られた中で行うこともあり、内容を具体的に突き詰めることは求めないものとした。自由闊達な議論を通して、新しいアイデアを生み出し共有することに力点を置いたためである。

こうした話し合いをもとに、以下の3つの提案がなされた。

・「ジェンダー系の話題の話しにくさ」

ジェンダーをめぐる話題を日常の中で話しにくいことが問題として共有され、その改善策として大学の教職課程へのジェンダーに関する知識の盛り込み、小中高の教員の研修、大学における LGBT 支援センターの設置等が挙げられた。

・「制度への提案／つながりの場をつくる／ジェンダー・リテラシー」

様々なジェンダーに関わる問題の解決には、①制度自体の改善、②各人が問題意識を共有する場が必要である、③あらゆる学問分野での正しい理解にジェンダーの知識が必要であること、この3点が重要であると話し合われ、教職員研修やキャンパスランチ、大学一年次のジェンダーに関する講義の必修化等の提案がでた。

・「新しい“学び舎”をつくる！」

学内における多くの問題が挙げられ、現状としてハードの面、ソフトの面共に、安心した学びの環境が整えられていないという課題が話し合われた。こうした課題の改善のためには、公開講義、中高生たちの協働プロジェクト、グループによるアート作品づくりといったユニークな提案がなされた。

おわりに—今後の展望—

三回のワークショップは決して大規模なものはいえないが、30人程度の規模で、参加者同士の距離が近く、深く、質の高い話し合いをおこなうことができた。ワークショップを通して、ジェンダーや性が、私たちの生活に直結する極めて近い領域であり、日頃、ジェンダーや性に対しての「これっておかしいよね？」という経験をもち、考えを巡らせてはいるが、それを言語化できる場が少ないということ強く感じた。本ワークショップは、学生が主体的にジェンダーに関する話題を言語化し、語り、共有し、問題を可視化する場を創造することの発端になったように思われる。一過性のイベントに終わらせるのではなく、毎年継続しておこない、さらには他の学生団体や関係機関等との連携を図ることにより、議論を深化させ、この場を学生によるジェンダーの知の発信の拠点にしていけると確信している。

なお、このワークショップの詳細は報告書にまとめられている。